ジャン＝フィリップ・トゥーサン登場

野崎　歓

一九八五年秋、パリの読書界で、一冊の不思議な小説の評判が、徐々に、しかし確実に広まっていった。出版元であるエディシオン・ド・ミニュイは、ベケット、クロード・シモンという二人のノーベル賞作家をはじめとして、いわゆるヌーヴォー・ロマンの大家たちを擁す純文学の牙城であるが、（デュラスの『愛人』という大成功があったとはいえ）ベストセラーのリストとは縁が薄い。そのミニュイ社から刊行された、百ページちょっとの薄い本が、いつのまにか数万部もさばけてしまったというのだ。しかも作者は弱冠二十八歳の新人

だという。フランス国内のみならず、国外からも俄然注目の集まったその一冊が、この『浴室』（La Salle de bain, Les Editions de Minuit, 1985）である。

とにかく新鮮な小説だ。斬新、才気縦横、しかも読みやすい。実験的性格をもちながら、魅力的なスタイルを備えてもいる。そして何といっても若々しい。若い感性の魅力がふんだんに溢れている。一読、新しい小説の誕生を実感する読者も少なくないのではないか。

物語は奇妙である。語り手で、主人公でもある青年は、いつごろからか浴室でぼんやりと時間を過ごすようになってしまう。服を着たまま浴槽に寝そべってひねもす暮らすというのだから随分変わっているし、はたの者にとってはただごとではない。世に背を向けるすね者のポーズとも見えれば、求道的な一念に発する隠遁の実践とも、あるいはたんに現実不適応からくる自閉的退行とも

考えられる。しかし読者は、「ぼく」の動機の説明を期待しても無駄だ。彼の人生において過去何があったのか、いっさい語られないし、感情・心理描写のたぐいはきれいさっぱり拭い去られている。今世紀前半、ドイツで、突然虫になった男がいたと同様、現代のパリでは、青年が突然浴槽に隠居してしまうということが起こり得るらしいのである。

この〝浴室男〟は、しかし、浴室から一歩も出ないというわけでもなく、普通の日常生活を捨て去ったわけでもない。それどころか、冒頭、数ページ目にしてもうすぐに浴室を出てしまうのだから大したことはない。彼は部屋部屋をうろうろもするし、甲斐性のない彼にはもったいないような恋人エドモンドソンと、普通に話しもすれば、愛の営みもする。あるいは、ぼんやり窓の外を眺めたり、空想に耽ったり。いわば彼は、一種のヴァカンスを自分に与えているのであり、その逗留先が浴槽なのだ。

第一部「パリ」は、浴室およびその周辺で過ごされる、この風変わりなヴァカンスの記録である。愉快なポーランド人チームがタコを相手に台所の流しで繰り広げる戦いは、そこでの最大のスペクタクルだ。

第二部「直角三角形の斜辺」では（それにしてもなんと変てこな題だろう、ここでわれわれは冒頭に掲げられた三平方の定理を作者が自作にまじめに当てはめようとしていることを知る）、「ぼく」が旅行に出ることで、いっそうヴァカンス色が強まる。「ヴァカンス」というのは、語源的には「欠如」であり、「無為」であり、「虚無」である、そのことを確認するかのように、主人公はどんどん虚無的、絶望的になっていき、神経症的状態に落ち込んでゆく。「斜辺」を転がってひとつのカタストロフにまで到る、これはいわば一種の「地獄下り」とも言うべき、深淵の体験である。エドモンドソンに対する態度のむごさにこの「ぼく」という人物の性格の悪さをつくづく思い知って、愛想を尽かす

向きもあるかもしれない。

第三部がまた変だ。再び「パリ」という表題をもってはいるものの、実際に「ぼく」がパリに戻るのは最後のほんの数ページにすぎない。彼の、ヴェネチアでテニスをするという、そもそも全く理解しがたい目的が、元気なお医者さん夫妻の好意によって遂に達せられるのかと思いきや、へそまがりの彼は突然しらけてパリに帰ってしまうのだ。ここで、この物語の全体を、一気に新たな構造のもとに閉じ込めてしまうような事態が生ずる。パリに帰ってから、「ぼく」はふたたび浴室へ復帰し、話はふりだしに戻ってしまうのだ。浴槽の居心地の良さがあらためて説かれる。「午後を浴室で過ごすようになった時」という巻頭の言葉が繰り返され、オーストリア大使館からの謎の手紙がふたたび届くに及んでは読者は考え込まざるを得ないだろう。この小説は、結局ぐるぐる回って出口なしなのではないか？　結末は冒頭につながっているのではない

か？　そして主人公――語り手は、浴室からヴェネチアを経て浴室に戻ったのであり、結局は自閉の殻に閉じこもったまま終わっているのではないか？「浴室を出た」という最後の一行も、たんに読者を第一部、ナンバー（11）に送り返し、小説上の時間の遡及・停滞をしるしづけるのみであって、主人公の浴室からの決定的離別を意味するには程遠いように思われるのだ。

徹底的に閉じてゆく回路の構築。それはそれで良いではないか。退行への意志の持続も、現実に対する消極的抵抗の形態としてそれなりの美しさをもちえよう。だが、『浴室』という小説の与える印象、その初々しい感触の因ってくるところは、そうした図式におさまりきるものではないようだ。端的に言って、各パラグラフに番号を振り、三部構成のそれぞれを直角三角形の三辺に擬す、その突出した形式化への意志というものは、痛快なまでの〝若気の到り〟にほかならず、しかもそこに妙におもしろおかしい、いたずら好きな精神のはたら

きが感じられる。冒頭から登場する「エドモンドソン」とは一体どこの誰なのか、男か女なのかさえなかなかはっきりさせようとしなかったり、ふらりと旅に出たその旅先がどこなのか言おうとしなかったり、といった具合に、はぐらかしとじらし、あるいはずらしの策略をこととする語り手の姿勢には、明らかに、読者への元気溢れる挑戦、訴えかけの姿勢が読み取れるのだ。それは「自閉症」の対極にある、コミュニケーションへのふつふつとした欲望である。さらにはまた、作者の誇示する「ピタゴラス」的意匠を仮に「幾何学的精神」の発露とでも呼ぶならば、この作品は、それと対照的な「繊細の精神」にも欠けてはいない。というよりも、その文章のはしばしまでにゆきわたった繊細さ——雨降りの風景の見方を懸命に伝授するかと思えば、放心状態から妄想的思考の発生、さらにはその妄想が現実によって打ち破られる瞬間までを連続的にすくいあげてみせる文章のしなやかさ——こそ、この作品の最大の魅力をなしてい

るのではないか？　思わずパスカル的用語を使ってしまったのも、風呂場をめぐる主人公の冒険の根幹は、「人間は部屋にひとり閉じこもることができるか」、「人間存在の悲惨は慰められうるものか」というパスカル的命題にあるのであり、そのことを「ぼく」は、ひねくれものの彼らしく、何と英語版によって『パンセ』を引用しつつ告白しているのだからである。さらに大きなことを言うなら、「私」を中心に据えての世界の徹底的な見直しの試み、という視点に立ってみれば、本編がデカルト、モンテーニュ以来のフランス文学の本流の上に成り立っていることは明らかなのであり、そうしたいわゆる「省察」の伝統を、ポスト・モダンと呼ばれる時代にふさわしい、クールでかつユーモラスな、細部に執拗にこだわりつつもなお極めて省略的な文章によって生き返らせたところに、若年の作者の端倪すべからざる力量を感じさせられるのである。

付言するなら、トゥーサンはじつはフランス人ではない。ベルギー人なので

ある。この屈曲に満ちたエゴチスムの世界はパリ的なもの以外では有り得ない、と感ずる読者にとっては、これは少々意外なことかもしれない。だがそうと知ると、作中、ベルギーチームが「フランス人のへたくそども」をやけに一方的に打ち破るシーンがあったことが、なんだか微笑ましく思い返されるのである。

『浴室』の魅力に惚れこんだ新人監督、ジョン・ルヴォフによって、この作品は一九八八年、フランスで映画化された。トゥーサンの世界を、「バロック的な饒舌さからは程遠い、凝縮されたミニマリスムの世界」と的確に定義づけるルヴォフ監督は、「とにかく原作に忠実に撮ること」を心がけたと語っている（『スタジオ・ボイス』十一月号掲載のジョン・ルヴォフ・インタヴュー参照）。モノクローム撮影の、スタイリッシュな画面構成で、トゥーサンの文体の映像

化に挑んでいる。西武シネセゾン系で公開。本書の読者はぜひご自分の目でその出来ばえを確かめてみていただきたい。

『浴室』で一躍スターダムに躍り出たトゥーサンは、その後既に二作小説を発表している。八六年に刊行された『ムッシュー』は、ムッシューさんというサラリーマンを主人公とするこれまた人を食った小説である。『浴室』第三部に顕著なユーモア小説への傾きがいよいよ前面に出た、滑稽なシーンの連続する作品である。フランスでの評判はさほど良くなかったらしいが、日常的光景から巧みに笑いの種を引き出してくる作者の遣り口はすでに名人芸のごとき余裕を感じさせる。昨年出版された『カメラ』は、ふたたび「ぼく」を主人公とし、彼と「ポルガイエフスキー」というまたも非・フランス系の姓名を持つ女性とのあいだの交流を、さわやかに描いている。スタイル的には前二作の延長線上

にありながら、リラックスした、快調な物語展開と語り口の自在さとが、作者の成長ぶりをはっきりとうかがわせる出来ばえで、フランスの若者のあいだに「トゥーサン・ファン」をいよいよ増加させたということである。今後、どのように読者の期待の裏をかきつつ、さらに新たな驚きを味わわせてくれるのか、じつに楽しみな新人の登場である。

最後になったが、集英社編集部にご紹介くださり本書の翻訳の機会を作ってくださった菅野昭正先生、鵜飼哲さん、未熟な訳者を励まし、助けて下さった集英社文芸出版部の池孝晃さんに、心からお礼申し上げる。東京大学のジャン＝クリストフ・ドゥヴァンク氏をはじめとする友人諸氏が、不明な点の解明にあたって大いに助けてくれたことも大変ありがたかった。そして、もっとも初期の段階から訳稿に目を通し、有益な提言を惜しまなかった青木真紀子さん

に感謝を捧げたい。

平成元年十二月

訳者